



パウル・クレー 《蛾の踊り》1923年 愛知県美術館蔵

Topics

パウル・クレー 東洋への夢

祈りをつづる染と織—タイの美しい布

江戸浮世絵巻

石井光楓—パリの青春／こんな作品あったよ～中学生が選ぶ所蔵作品展



パウル・クレー《無題（二重の目測）》1938年頃  
糊絵具・水彩／紙・厚紙 パウル・クレー・センター蔵

# 東洋への夢

## Paul Klee and East Asia



図1 パウル・クレー《片足で躍る三人の裸の人物》1905年  
鉛筆／紙・厚紙 パウル・クレー・センター蔵



図2 葛飾北斎『北斎漫画』八編より 文政元年（1818）  
浦上蒼穹堂蔵

クレーは旅が好きな画家でした。北アフリカのチュニジアやエジプトなどヨーロッパの外にも旅し、異国で出会った風景や事物を、クレー流にメタモルフォーゼしつつ描きました。そのクレーもさすがに東洋を訪れたことはありませんでしたが、東洋を「夢」見つつ、書籍や浮世絵から得たイメージの断片を、作品に取り入れていきました。

本展は、世界的に著名な日本人クレー研究者奥田修氏を監修に迎え、スイス、ベルンにあるパウル・クレー・センターの協力のもと、クレーと日本・中国文化の繋がりに焦点をあてます。漢詩にインスピレーションを受け描かれた「文字絵」をはじめ、クレーと中国文化との関わりはこれまでも度々注目されてきましたが、クレーが『北斎漫画』をはじめとする浮世絵から直接影響を受けていた事実は、日本国内でさえあまり知られていません。奥田氏はこのテーマにいち早く注目し、20年以上にわたって研究を進めて来ました。

### 北斎を模写したクレー

1902年、22歳のパウル・クレー（1879-1940）は、旅先のフィレンツェでヨーロッパ公演中だった川上音二郎一座の舞台を観て、主演の貞奴と日本の演劇から強い印象を受けました。おそらくクレーにとってこの体験が、「日本」と直に触れた最初の機会と推測されます。そして1905年以降、浮世絵を原図にした作画上の試みを手掛けていきます。

19世紀後半のフランスで隆盛を迎えたジャポニズムは、20世紀初頭になって遅ればせながらドイツにも伝播します。アール・ヌーヴォーのドイツ版とも言うべきユーゲント・シュティールの流行と、同時期のことでした。クレーがドイツのミュンヘンに移住した頃、すでに当地にも浮世絵のコレクターがいましたが、そのなかにクレーの知人で出版業者のラインハルト・ピーパーが含まれていました。ピーパーは、クレーも愛読した『中国の叙事詩』を出版した人物で、クレーが属した芸術家グループ「青騎士」の『青騎士年鑑』も出版しています。このピーパー所有の『北斎漫画』を模写したと思われる素描《片足で躍る三人の裸の人物》を、クレーは1905年に制作しています。(図1) この時期のクレーは、表現主義的に歪曲された人物線描を数多く手掛けていますが、これもそのなかの1点です。『北斎漫画』八編のなかの「無礼構図」(図2)から写されたこの3体の人物素描は、細部を変更され、あるいは構図を裏表に反転されつつも、原図と極めて類似したかたちで描かれています。単一の図像を写した単一の素描であれば、偶然の一致と言うことも考えられますが、版本の同一ページにある3つの人物像が、1枚の紙に極めて似た構図で写されていることから、クレーがピーパー蔵の『北斎漫画』を見た可能性は高いといえるでしょう。

クレーといえ色彩画家のイメージが先行しますが、彼が鮮やかな色彩に目覚めるのは、1912年、パリでロベール・ドローネに会い、

1914年、チェニジアに旅した頃からです。1900年代、線描画家として活動していたクレーが、北斎漫画の巧みなスケッチに惹きつけられたのは、決して意外なことではありません。またこの時期のクレーが、フランス印象主義、ポスト印象主義の影響を受けていたことも知られており、浮世絵の構図を援用したゴッホの作品などからも、間接的に日本美術の可能性を学んだと言われています。本展では《片足で踊る三人の裸の人物》のほかにも、浮世絵等から影響を受けたと思われる作例をいくつか展示しています。

## 中国的・東洋的イメージ

浮世絵を直接参照した作例は1910年代中頃を最後に姿を消してしまっていますが、クレーの作品から、東洋的イメージが消え去った訳ではありません。1916年に『中国の叙事詩』からインスピレーションを得て「文字絵」を描いて以来、クレー流に解釈された中国イメージが繰り返し作品に現れます。本展の出品作のなかにも、《中国人とともに》(1920)、《ウンクライヒから中国への道》(1920)、《中国の美貌(的確)》(1927)などタイトルに中国の名が付された作品がありますが、なかでも抑えた色彩で描かれた《中国風の絵》(1923)は、画家独自の中国イメージをうかがい知ることのできる興味深い作品です。(図3) 1897年にドイツが中国の膠州湾を占領して以来、ドイツの知識人たちのあいだで、中国に対する関心が徐々に高まってきました。日露戦争の勝利で「西洋化」したことを証明した日本への関心が薄れて行くなかで、いまだ西洋化せざる中国が、クレーをはじめとするドイツの文化人たちの心をとらえたのです。

また今回の展覧会では、個性豊かなクレーの作品のなかから、東洋を連想させるイメージをいくつか選んで展示しています。例えば晩年の異色作《別れを告げて》(1938)は、黒の糊絵具で墨絵のように描かれたドロ잉ですが、その極端に縦長の版型もあいまって、東洋との繋がりを感じさせる作品です。(図4) 不治の病に冒された最晩年の、おそらく明確に死を意識し始めた頃に描かれたこの《別れを告げて》からは、他の晩年様式の作品に時おり現れる暗さや不気味さは感じられず、何ともいえない寂しさや悲しさが漂います。シンプルな線で描かれた、物思いに沈む人物の表情が独特の余韻を見せ、小品ながらも印象深い作品です。

クレーと同時代のドイツ圏の画家達のあいだでは、日本や中国をはじめとする非ヨーロッパ圏の美術を研究し、作品に取り入れることは珍しくありませんでした。ただクレーの場合、そういった作品を参考にするときでも、原図から戦略的に距離を取りつつ、大幅にデフォルメや改編を施すことが多かったと奥田氏は述べています。直接的な影響が明らかな作品に習作や素描が多いのは、そのような理由からでしょう。そのためこれまでクレーと東洋(とりわけ日本美術)との繋がりが注目される機会は多くありませんでしたが、この展覧会でクレーの「東洋への夢」の一端をご覧いただき、画家の知られざる一面に触れていただければと思います。

[学芸員 水沼啓和]



図3 パウル・クレー 《中国風の絵》1923年  
油彩・水彩/厚紙 宮城県美術館蔵



パウル・クレー 《三人のアラビヤ人》1915年  
ペン・水彩/紙・厚紙 宇都宮美術館蔵



パウル・クレー 《女の館》1921年  
油彩/厚紙 愛知県美術館蔵



図4  
パウル・クレー  
《別れを告げて》1938年  
糊絵具/紙・厚紙  
パウル・クレー・センター蔵

## パウル・クレー 東洋への夢

2009年5月16日(土)▷6月21日(日)

10:00—18:00 (金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 6月1日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

\* ( )内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

\*前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(6月21日まで)にて販売





タイ・ルー族  
《女性の上衣と筒型スカート(パー・シン)》



タイ・ルー族/ラオス ムアン・ペーン  
《筒型スカート(パー・シン)》  
\*裾の赤と青の布は未婚の印



タイ・デーン族  
《筒型スカート(パー・シン)》部分

瀧澤久仁子コレクション

## 祈りをつづる染と織——タイの美しい布

この展覧会では、高度な織と染の技術を持つ伝統的なタイ族の布文化を紹介します。我々日本人は、「タイ族」というと、タイの国に住む人々をイメージしがちです。また「タイの美しい布」といえばタイ・シルクに代表されるというイメージも強いことでしょう。実は日本人にとってのタイは、バンコクを首都としたタイ王国を中心に入ってくる情報とイメージに偏っているところがあります。

しかし現在の国境は、タイ族の長い歴史からすると比較的新しく設定されたもので、チェンマイを中心とするラーンナー王国とバンコクを中心とするサイアン(シャム)王国が18世紀の終わりに併合されてタイ王国が成り立ったものです。タイ族ということで考えるならば、その民族地図ははるかに広く、タイの国ばかりでなく中国、ベトナム、インド、ラオスなどが含まれ、この地域を「タイ文化圏」と呼ぶこともあります。明確な国境が成立する以前には、このアジア地域には、いくつかのタイ族の王朝が点在するという状態で、その諸国の王様を仏様の図に例えて「曼荼羅のようであった」と形容されることもあるそうです。

タイ族の祖先は、古代長江下流域からインド・アッサムにおよぶ広域に住んでいた「越人」と言われているようで、他民族の支配に圧迫され、現在の中国雲南省西双版纳(シプソン・パンナー)傣族自治州、そして東南アジアへと移動、分布した民族です。現在もシプソン・パンナーは中国でもタイ族(中国では傣族)の暮らす地域として知られています。「西双版纳」の漢字があてられたその地名は、タイ語から「シプソン」が12、「パンナー」は1000の田圃という行政単位を意味しているというのも面白いことです。

遠い古代に先祖を同じくし、今はそれぞれの国に分かれて暮らすタイ族ですが、なお共通の美意識はあるのでしょうか。これがこの展覧会の大きなテーマでもあります。

一つのポイントは、幾何学的な文様の表現でしょう。織の技術

がどんなにあっても決して写実を目指すのではなく、幾何学的形、抽象化による文様の表現を好んでいます。そしてその文様は、祈りを込めて精霊などを表していることが多くあります。現在タイ文化圏の国々は仏教国として知られていますが、民族には古代より自然界に精霊が存在するという信仰が根強くあり、このような仏教以前からの信仰が、タイ族の美しい織文様の中に表現されてきたのです。自然=神を擬人化した人型、頭が象で体は獅子であるという動物など、それらは災いを退け、家族の守護や豊穡を願う祈りの表象でした。

またパー・シンと呼ばれる筒型スカートに代表されるように、布に立体的な裁断をしないのも伝統的な特徴です。展覧会では、どこまでお見せできるか悩まれるところですが、一枚の平らな布が、その着こなしによって素晴らしい造形となって立ち現れ、布の美しさも表情を変える様は圧巻です。

どちらかといえば写実性よりも幾何学的で装飾的な表現を好む傾向、精霊信仰、布を立体的な裁断なしに用いるところなどは、どこか日本の美意識にも共通するものが感じられはしないでしょうか。

この布を収集されたのは染織家であった瀧澤久仁子さんですが、残念ながらこの展覧会の準備をはじめた2007年の秋に亡くなられ、現在はご遺族がご遺志をついで展覧会が実現する運びとなりました。瀧澤さんは1989年より古都チェンマイに移り住み、ご自身の制作に勤む一方でこの膨大な布のコレクションをされましたが、その収集のきっかけとなったのは、タイ・デーン族のパー・ビエン(肩掛け)に出会ったことであったそうです。そして周辺諸国にも足を運びながら、布をめぐる旅をはじめられ、多くの美しい布を丹念に集めたのです。瀧澤さんのコレクションの概要は、「太陽と精霊の布」展(2004年 千葉市美術館ほか)においてすでに公開され、その少数

民族たちの崇高なまでの美意識と布への思いの深さをご記憶の方も多くいらっしゃるでしょう。

瀧澤さんが布に対して大変な情熱をお持ちであったことは言うまでもありませんが、人に対して分け隔てなく接することのできる優しい笑顔の素敵なお方で、そうであればこそタイ族の暮らしの中から素晴らしい布を見出すことができたのだらうと察せられます。決して王侯貴族の高級布だけが美しいのではなく、暮らしの中の布の美しさを大切に感じて収集されたことこそ、このコレクションの最大の特徴であり、我々を感動させるところでもあります。

実は「太陽と精霊の布」展で中心となったトン族という中国の少数民族も、言語学的分類ではタイ族に属します。そのことは瀧澤さんも生前から気にかけていたことでした。タイ・デーン族、タイ・ダム族、タイ・ルー族など、いくつかに分かれたタイ族は、早くから定住が進んだためか、総じて織の技術に優れていた一方で、トン族がむしろ刺繍に長ける民族となったのはどうしてなのでしょう？そしてその共通点とは？

今回の展覧会では、瀧澤さんが最も愛されたタイ族の布文化という視点を深め、あらたにコレクションを調査した上で作品を選定したもので、その多くの作品が初公開となります。また瀧澤さん自身が旅の中で撮影された写真も合わせてご紹介いたします。

今では機械産業、商業主義の産物になりがちな感のある布の世界ですが、母から娘へと伝えられた手仕事の美の生きるタイ族の布の粋を、この機会に是非ご覧ください。

[学芸課長代理 田辺昌子]



タイ・ルー族  
《肩掛け(バー・チェ)》  
\*女性が好きな男性に織ってプレゼントする



タイ・デーン族  
《女性の肩掛け(バー・ピエン)》



タイ・ユアン族の女性たち 瀧澤久仁子撮影

#### 関連イベント

##### ■記念講演会「タイの衣服と布にみる民族の心そして生活」

7月12日(日) 14:00より

11階講堂にて/先着150名様/聴講無料

講師：吉村紅花(文化学園服飾博物館 学芸員)

##### ■Thitipol Kantewong(ティティボン・カンティウオン)コンサート

「メコンの精霊」(2回公演)

\*注目の若手タイ音楽家が伝統楽器を演奏します。

7月17日(金) 18:00より

7月18日(土) 14:00より

1階さや堂ホールにて/先着150名様/無料

\*開場は開演の30分前を予定しています。

\*当日開館時(10:00)より、8階受付で整理券を配布します。ただし整理券配布順がご入場の順番とはなりませんので、ご了承ください

##### ■ワークショップ「タイ・カービング」(事前申込制・高校生以上)

\*タイ・カービングの技法を使って、石けんから蝶の形を彫り出します。

8月1日(土)第1回 11:30より、第2回 13:30より、第3回 15:00より

11階講堂にて/定員 各回8名様/無料(見学は自由)

講師：中村富士男(タイ教育・文化センター講師)

[申込方法]

往復葉書に住所、氏名、電話番号、希望する時間をお書きの上、〒260-8733 千葉市美術館「タイの美しい布 ワークショップ」係までお送りください。

(7月17日締切。当日消印有効)

##### ■学芸員によるギャラリートーク

7月1日(水) 14:00より

##### ■ボランティアによるギャラリートーク

7月1日以外の会期中毎週水曜日 14:00より

#### 瀧澤久仁子コレクション 祈りをつづる染と織—タイの美しい布

2009年6月27日(土)▷8月9日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 7月6日(月)、8月3日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

\* ( )内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

# 江戸浮世絵巻

～江戸の浮世を絵巻のごとくご覧に入れる、江戸浮世絵の巻～

千葉市美術館といえば浮世絵。千葉市美術館が浮世絵の収集・展示に力を入れてきた理由は、まず、浮世絵の祖、菱川師宣(?-1694)が、千葉市域からは離れるものの、房総出身であることです。千葉市美術館は昭和57年(1982)に計画された後発の美術館で、ゼロからコレクションを形成しようとしていました。すでに首都圏には国公立美術館も多く、その中で特色を打ち出すために、菱川師宣のご縁で浮世絵に重点を置くことになりました。浮世絵は市場での流通が多く、比較的集めやすかったということも、現実的な面から浮世絵収集の追い風になりました。まず昭和60年(1985)から3年にわたって江戸時代後期の浮世絵師浜斎英泉の作品200点余を購入しています。この英泉の作品は今中宏氏の収集によるもので、所蔵作品展ではまとめて展示したことがありますが、本格的な企画展としての英泉展も将来的に開催したいものです。今回は10点の英泉作品を展示します。

平成7年(1995)11月に開館した千葉市美術館の最初の展覧会が「喜多川歌麿」展でした。大英博物館と共同で企画したこの展覧会は約500点を展示し54,287名のお客様にご覧いただきました。「喜多川歌麿」展にも出品された《納涼美人図》(図1)他、今回は20点余の歌麿作品を展示します。平成12年(2000)には「浮世絵の千葉市美術館」を運命づけた絵師菱川師宣の展覧会を開催しました。師宣については《衝立のかけ》(図2)他約10点を展示します。平成14年(2002)、錦絵(多色刷浮世絵版画)の創始者、鈴木春信の展覧会を催しました。春信作品は《坐舖八景 台子の夜雨》(図3)他約20点を展示しています。一昨年には本格的な鳥居清長の展覧会を開催しました。今回は資料的な作品も含め《美南見十二候 六月 品川の夏》(図4)他約20点の清長作品を展示します。他に浮世絵の特別展・企画展として「歌川国芳」「大英博物館 肉筆浮世絵名品展」「江戸の摺物 粋人たちの贈り物」「青木コレクション名品展 知られざる広重の肉筆を中心に」「スイス・パウアーコレクション 浮世絵 美の極致」「ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展」「東海道・木曾街道 広重 二大街道浮世絵展」などを今まで開催してきました。

以上のような浮世絵の展示活動に賛同して、浮世絵作品のご寄贈、ご寄託をお申し出いただき、コレクションを豊かにすることができたことありがたい限りです。

今回の「江戸浮世絵巻」は千葉市美術館の浮世絵コレクションの名品展であるとともに、今年秋からの改修・休館を前に美術館の開館以来の歩みを浮世絵展で振り返る試みでもあります。同様に名品展の性格を持つ「千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展」が昨年夏に岡山県立美術館で開催されましたが、なかなかまとめて展示する機会がありません。所蔵浮世絵の名品をこの貴重な機会にお楽しみいただければ幸いです。

[学芸員 伊藤紫織]



図1 喜多川歌麿《納涼美人図》



図2 菱川師宣《衝立のかけ》



図3 鈴木春信《坐舖八景 台子の夜雨》



図4 鳥居清長《美南見十二候 六月 品川の夏》

## 江戸浮世絵巻

2009年5月16日(土)▷6月21日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(6月1日)

[観覧料]	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

\* ( )内は団体30人以上の料金

\*同時開催「パウル・クレー 東洋への夢」展のチケットをお持ちの方は無料



## 石井光楓—パリの青春

洋画家石井光楓(1892-1975)は、現在のいすみ市岩船にあった網元の次男に生まれ、はじめは日本画を学びましたが、洋画家を志して大正4年(1915)には第2回院展、同10年(1921)に第3回帝展に入選と活躍をはじめます。しかし光楓は国内で洋画を学ぶことの限界を覚えたのでしょう。大正10年に渡米しシカゴのアート・インスティテュート、さらに同14年にはフランス・パリのアカデミー・ジュリアンに入り、本場での本当の洋画を学ぶのです。現在とは交通手段もまったく違う当時の留学がどんなに大変であったか察するに余りありますが、光楓の洋画に対する志の高さが、強い意志をもった実行力につながったものでしょう。光楓の若々しく純粋な思いは、この時代の作品に最もよく表れているように思います。当時のパリには洋画家として知られる藤田嗣治(1886-1968)もいて交流があり、そこに集う画家たちには独特の若い熱気がありました。やがて光楓はパリの画壇でも注目され、数々のサロンに入選するようになります。

ご遺族のご好意によりこのたび千葉市に寄贈された光楓作品の中から、滞欧米時代の作品を中心に展観し、その画業を振り返ります。

[学芸課長代理 田辺昌子]

関連企画

■講演会「石井光楓の生涯とその画業」

7月11日(土) 14:00より / 11階講堂にて / 先着150名様 / 聴講無料

講師：大久保守(千葉県立中央博物館 海の博物館 研究員)



石井光楓《フランスのビアホール》水彩、紙 1920年代

## こんな作品あったよ～中学生が選ぶ所蔵作品展～

南蛮屏風を背にした遊女、画面には鳥籠や豪華な時計など様々なものが描かれ、その白い顔に浮かぶ表情とともに、様々な想像をかきたてます。《和蘭陀土産》(横尾芳月、1926年)は、中学生の関心が集中した作品の一つです。

昨年度の後期、市立中学校57校に協力を呼びかけ、当館のコレクションの中から予め90点余りを選び、スライド等を用いて鑑賞する授業を各教室で実施していただきました。実施にあたっては、美術科教員に学芸員を加えた10人ほどの研究グループが検討を重ね、教室での鑑賞授業に取り組みやすいよう、指導案とワークシートを用意しました。本展示は、その成果をもとに構成します。学校と美術館、それぞれの役割を尊重しつつ、日常の仕事(毎週の授業であったり、展示事業であったり)の中で段階的に取り組んできた連携事業の成果といえます。「こんな作品あったよ」のタイトルどおり、興味を持った作品を選び出し、その理由を推薦文として書くまでが昨年度の授業でしたが、もっと見たいと思う気持ちは必ず次へとつながってゆくでしょう。この2年越しの試みが、今後の鑑賞授業への手がかかりになればと思っています。

教室では、「共感度」をもとにして、個人作業にグループ作業を重ね、推薦する作品を選びました。大人のお客様には、当館おなじみの作品を、今回は中学生の視点を借りて、少し違った角度からご覧いただきたいと思います。会期中は、子どもたちだけの来館をサポートする鑑賞プログラム「中学生のためのギャラリークルーズ'09」や、先生方のためのワークショップも予定しています。

[学芸員 山根佳奈]



横尾芳月《阿蘭陀土産》1926年

## 石井光楓—パリの青春

### こんな作品あったよ ～中学生が選ぶ所蔵作品展～

2009年6月27日(土)▷8月9日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(7月6日、8月3日)

[観覧料]	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

\* ( )内は団体30人以上の料金

\*同時開催「祈りをつづる染と織・タイの美しい布」展のチケットをお持ちの方は無料

## ◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

当館スタッフが毎回1つのテーマを選び、わかりやすく解説します。参加は無料です。

〔時 間〕 14：00より(開場は30分前)

〔場 所〕 11階講堂

〔定 員〕 先着150人(入場無料)

○第3回 6月20日(土)

『『北斎漫画』の魅力』

〔講師〕 小林 忠(当館館長)

○第4回 7月25日(土)

「若き画家たちの挑戦—石井光楓とその時代」

〔講師〕 田辺昌子(当館学芸課長代理)

○第5回 8月8日(土)

「房総の芸術家たち」

〔講師〕 藁科英也(当館学芸係長)

## ボランティア日和 episode20

わたくしのボランティア・デビューは、定年時に東京国立博物館での一期生のそれでした。その後、江戸東京博物館などを経験し、現在は上野の国立科学博物館と当館にて続けております。美術・歴史・科学と、知識知能よりも「心臓」で活動しています。色々楽しい思いをしたり、恥をかいて大汗を流したり、それはそれは語り尽くせません。ボランティアは正直なところ、他人のお世話より、自分のためになっているところが多い気がします。ぜひ中高年の方のもとより、時間があれば若い方の参加が望まれます。

さて、東博や江戸博はどちらかという中高年のオンパレードの感があります。科博は恐竜展のときは、子供さんで大盛況。当館ではあのような大行列になることはありませんが、展示作品より他人の頭を見に来たという感想がないのは、館当局者としては良いのか悪いのか、どんなものでしょうか。

中高年オンパレードを退散して、小中学生の鑑賞教育に宗旨替えして、現在に至っています。小学生たちは借りてきたネコの集団、中学生は何を考えているやらの集団ですが、これらの集団から作品を観ての感性を引き出す!! 言うは易く行うは難い、その通りです。なにしろ、前期高齢者のわたくしの感性が堅くコリ固まっているのですから。いつもいつも、作品を前にして四苦八苦の立ち往生など毎度のことです。それでも、雨にも負けずの精神で難関に立ち向かっているのですが、敵も然るもの、わたくしには発想のカケラもない

ユニークな彼らの話を引き出した時は、本当に嬉しいものです。決して自主的に美術館へ来た連中ではないのですが、雰囲気慣れてくると、本当に面白い発想を聴くことができます。眼福ならぬ耳福となります。彼らにとっては授業時間の一コマですが、それが頭のスミに残る印象を感じてくれたらしめたもの、そしてバスで帰る際、来てよかったという言葉と態度(これも中学生から探ることは不可能ですが)が発見され、最後にバスの窓からお互いに手を振りあうとき、わたくしもホッと、最も嬉しい時間です。この楽しみがあつてこそ、鑑賞教育の醍醐味です。彼らが将来リピーターになってくれることを期待しながら。

〔美術館ボランティア 黒島宏一〕



小学生のグループ鑑賞をリードするボランティア



### 〔交通案内〕

- JR千葉駅東口より徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ。貝塚IC下車。国道51号を千葉市街方面へ約3km。広小路交差点近く。
- 地下に駐車場があります。

### 〔編集・発行〕

千葉市美術館  
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan  
<http://www.ccma-net.jp>  
〔発行日〕 2009年5月16日  
〔印刷〕 半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**  
Chiba City Museum of Art